



YMCA News

2018年10月10日発行
 特定非営利活動法人
 盛岡YMCA
 〒020-0015
 盛岡市本町通 3-1-1
 Tel 019-623-1575
 Fax 019-623-1579
 www.moriokaymca.org
 発行人 / 演塚 有史
 編集 / 本部事務局



「YMCAとのかかわり、感じていること」

盛岡YMCAとの出会いは、昨年に開催された第一回国際・チャリティラン2017実行委員会からとなります。私が勤めている社会福祉法人カナンの園と同じキリスト教主義を理念に掲げている団体であります。実行委員会では開会祈祷で始まり、閉会祈祷で終わります。私はノンクリスチャンではありますが、日々の生活の中でふと立ち止まって、誰かのことを考えてみる、そしてその人が苦しみの中にある時に、そっと祈りを持って苦しみを軽くしてあげたいと願うことができるのは、人間としての原点であり、人間関係の本来の繋がりのあり方ではないかと考えます。

マザーテレサが日本で講演された時に、「愛の反対は憎しみではなく無関心です」と話されました。物質が豊かであると言われる日本においても、無関心という行動が人間の心の貧困を生み出すのだと話されました。

国際・チャリティーランでは、スローガンに「私たちは障がいのある子どもたちを応援します」とあります。障がいを持って生まれた人たちを「チャレンジド」と呼んだりもします。生まれながらハンディキャップを持ちながらも、人生にチャレンジして生きている方々だからだそうです。

あるご家族に家庭訪問に行ったときに、出産をしてすぐ両親に障がいがあるお子さんですと医師から宣告を受けて泣いている妻に夫が「神様はこの家庭なら立派に育ててくれるだろうと選んで下さったのだから大切に育てていこう」と話されたという話を聞きました。その夫はその後若くして病気で亡くなってしまいますが、私もその遺志を受け継いで大切に支援させていただこうと心に刻んでいます。

考えを変えれば、岩手や盛岡という土地を選んで生まれてきたチャレンジドの子どもたちが、この地に生まれてよかったなあと考える地域をつくっていくことが、皆さんの幸せに繋がるものだと思います。

「共生社会」という言葉がありますが、それを実現する一歩は、隣の困っている人に声をかけ、話を聞き関心を持つということから始まります。盛岡YMCAの取組みは、健全な地域社会づくりの一歩に寄与するものと益々期待するものです。

社会福祉法人カナンの園 ヒソブ工房 所長 阿部 孝司

盛岡 YMCA の使命

私たち、盛岡 YMCA は、イエス・キリストによって示された生き方に学びつつ、豊かな自然と歴史的伝統に満ちた岩手の地で、こども、家族、地域とともに公正で平和な世界の実現を目指します。

1. こどもたちの個性を大切に、それぞれの夢や希望、生きる力を育みます。
2. 家族の絆といのちの大切さを深め合います。
3. 共に生きるために、異なった文化、多様な価値観と出会う場を提供します。

第2回盛岡YMCAインターナショナル・チャリティーラン2018



■ 寄付を頂いた企業数	53社
■ 寄付を頂いた個人数	23人
■ 当日のボランティア数	109人
■ 参加いただいた たすきリレーチーム数	32チーム
■ 参加いただいたランナー数	156人
■ 来場者数	131人

9月23日(日)岩手県立大学陸上競技場を会場とし、第2回盛岡YMCAインターナショナル・チャリティーランが開催されました。障がいのある人も障がいのない人も、違いを超えてつながる真の豊かな社会を目指しチャリティーランは全国のYMCAで開催しています。第2回となる今年の盛岡YMCAのチャリティーランでは、「知ってもらい、来てもらい、感じてもらう、考えてもらう」ということをテーマに開催しました。盛岡の地でチャリティーランという運動が行われているということを知ってもらい、その想いに賛同して頂き様々な形で参加してもらい、チャリティーランの中で生まれる違いを超えてつながる空間を感じてもらい、自分たちの地域や社会で違いを超えてつながる社会を創るために、自分たちには何ができるかを考えてもらう。どれだけこの目標が達成されたかはわかりませんが、皆様の想いを少しでも形にできたなら幸いです。

たくさんの人たちに支えられ、助けられ、今年のチャリティーランも開催できたこと、また、ご協力頂きました企業の皆様、個人の皆様、当日ボランティアとして想いを共にしてくださった皆様、仲間と共に気持ちをひとつにし、たすきをつなぎ走っていただきましたランナーの皆様、チャリティーランに関わってくださった全ての人に感謝いたします。ありがとうございました。違いを超えてくつながる社会を実現するために、これからも私たち盛岡YMCAはたくさんのひとりひとりの方達とつながり、進んでいければと願っております。

第3回のチャリティーランも「自分」ではなく「自分たち」で創り出していきますので、皆様の想いをよせていただきますよう、よろしくお願い致します。

第2回盛岡YMCAインターナショナル・チャリティーラン2018
実行委員会担当主事 伊藤眞太郎



～中高生キャンプ～



9月15日(土)～17日(月・祝)、秋田県仙北市の田沢湖キャンプ場で2泊3日の中高生キャンプを開催いたしました。中高生キャンプは、盛岡YMCAユース委員会が企画したプログラムであり、中高生にとって居場所・目標作りの場、仲間との出会いの場、自分と相手への気づき・認め合いを大切にできる場となることを目的として行いました。

今回の参加者は6名。男の子、女の子ともに3名で高校2年生が3人、高校3年生が3人となりました。互いを知っている子もいれば、まったく知らない子もいる中でスタートしたキャンプですが、ご飯をきめたり、キャンプを通して皆のための役割分担を決めたり、予算の中で相談しながら買い出しをしたりと、メンバーで話し合いや関わりを持つ中で、自然と関係が築かれていきました。初めは男の子だけ、女の子だけであることが多かったメンバーも、一緒に何かをすることが当たり前となり、メンバーからも『男女皆で～しよう!』という声は自然と出てきていました。

また、自然との触れ合いや遊びだけではなく、2日目には『人間関係トレーニング』を実施し、「自分と相手の違いへの気づき」「伝えたいことを伝えたい人に伝える意思表示」「互いに話し合う、声を掛け合う大切さ」についてのワークショップを行い、思春期真っただ中であるメンバー達に人と人が関わりを持つ上で大切な事、大切にしたい事を伝え、感じてもらいました。

人間関係トレーニングの最後には、それぞれに振り返りも書いてもらい、円になって皆でそれぞれが感じた事を共有しました。その中には、普段、自分の名前を呼んでくれる人や話しかけてくれる人もほとんどおらず、今回キャンプ最初に自己紹介があり自分の名前を皆が覚えてくれていた事がとても嬉しかったという意見や、今回のキャンプでの出会いを含めて自分は恵まれている、日頃から感謝しなければいけないことが多いと感じた、自分が失敗したときにチームの皆が笑って流してくれたのが嬉しかった等の意見があり、ほかのメンバーに向かってそれぞれが自分の口で真剣に話していたのがとても印象的でした。今回のキャンプを通して、改めてキャンプという一つの共同体で過ごす生活のもつ力の凄さ、そしてスタッフ・リーダーを含めた参加メンバーの違いを超えて仲間になっていくことの喜び・大切さを強く感じました。中高生キャンプは多くの方のご理解・ご支援なしには開催できなかったプログラムです。

この様な気づきの場、成長の場を参加したメンバー、そして私たちに与えて下さった事に改めて感謝を申し上げ、終わりの言葉とさせていただきます。本当に有難うございました。



盛岡YMCA 中高生キャンプディレクター 小川嘉文

～福島スタディツアー～

2018年9月5日～6日の2日間、「福島スタディツアー2018」が開催されました。盛岡YMCAから12名のリーダー・スタッフが参加し、石巻栄光教会の川上直哉先生を含めた13名での1泊2日のツアーとなりました。

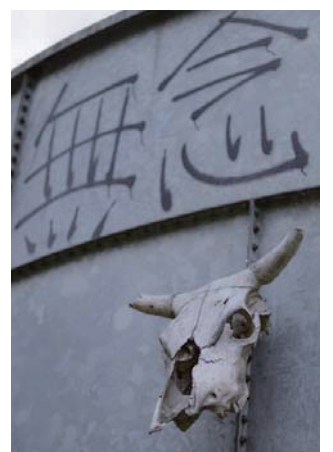
内容として、カリタス南相馬のスタッフである南原さんにご同行いただき、ガイドをしていただきました。福島第一原発(富岡)や、津波被害に遭った地域(双葉・大熊)などバス内で説明を聞いたり、おだかぶらっとほーむ(南相馬市小高区)や希望の牧場(浪江町)では現地の方の実際の声を聴き、会うからこそこの想いや雰囲気を感じてきました。

被災した地域ではいまだに震災の跡が残っており、バリケードで封鎖されている町や、震災当時のポスターや看板がそのままの建物、津波の時間で止まったままの時計などもありました。話の中には復興していると報道するためにすごく小さな範囲で建物を綺麗に建て直したということも聞きました。実際に行ってみないと分からない被害の大きさや同じ東北でありながら現地までの距離などを感じました。

盛岡YMCAとしては宮古での活動を続けています。宮古では感じることの出来ない原発被害を目の当たりにして、参加したリーダーたちも驚きや恐怖に包まれていました。現地の人の声は、震災を乗り越え、前向きに進み始めた人、震災に関して風化しつつある現状に怒りを覚えている人など福島県内にもたくさんの方がいます。その人たちとの出会いから、今まで知らなかったことへの気づき、自分たちには何ができるのかを考えて、まずは近くにいる人たちに伝えていくという行動に出る。

参加したメンバー全員が、帰りのバスの中はもちろんのこと、帰ってからも「福島についてもっとたくさん話したい!」「知らないことを勉強したい」という気持ちでした。たった2日間のツアーでしたが、たくさん知って、たくさん考えて、たくさん話した、いいスタディツアーになったのではないかと思います。

盛岡YMCAスタッフ 向平悟



「無くすこと」

京都には、平安高校という高校と平安女学院という大学がある。同じ系列と思いきや、前者は仏教系で、もう一方はキリスト教系のミッション・スクールである。仏教にもキリスト教にも合い通じる「平安」とは一体何なのだろう。

仏教には、「無分別」「無常」「無我」「無心」などという智慧があるらしい。キリスト教には、旧約聖書のコヘレトの言葉に「空の空、一切は空である」という記述がある。(1章2節)

名著「日本の靈性」を著した東洋哲学、禅の大家の鈴木大拙氏の最期を看取ったのは、京都大学YMCAのOBである聖路加病院の医師、日野原重明氏だった。生前二人の間には宗教を超えた親交があったという。昔、ある牧師から宗教というのは、山を登るようなものでいろいろな道がある。8合目、9合目と頂上が近づくにつれてそれぞれの宗教が語っていること大切にしていることに気づいてくると教えられた。(もちろんカルト宗教は除いての話だが...)

宗教的対立というのは、本当に大切なことを理解していない者通しがふもとのところでドンパチすることなのだろう。2合目あたりでウロチョロしている僕なんかには、前述した二人の境地は到底想像できないけれど、なんとなく感じるのは、「無くす」ことだと思えるようになってきた。いろいろなことを「無くした」時、自分の中のいろいろなことを「削ぎ落とした」時、目見えない何か尊い存在から既に与えられている「平安」が見えてくるのではないだろうか。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

新約聖書 フィリピの信徒への手紙 2章6-8節
 盛岡YMCA 総主事 濱塚有史

日本でメンバーも考えた②

思わぬ声かけられた。「いらっしゃいませ!」という店員さんの声が店全体に広まった。買い上げの時も商品の一つ一つ丁寧に扱い、店を出る時も決して気を抜く事なく「ありがとうございます。またお越しくださいませ!」とお辞儀をしながら最後まで挨拶をした。食事でレストランに行っても同じような事をされ私は疑問を持った。なぜなら、これまで行った国々、特に母国では通常、店員がお客さんに挨拶することはめったに無く、来客に対して感謝の心をあまり持たないののである。丁寧な接客や挨拶を支えている「お客様は神様」の精神は、日本人の立場から見ると、ごく一般的な事で当たり前だ。

しかし、私たち外国人から見ると、それは決して、ごく一般ではなく珍しい事である。日本の挨拶の素晴らしさは世界のどこを探してもない。だから、日本という国は時が経っても魅力的な国であると多くの外国の人に言われるのであろう。

これを見て、その場にいるお客さんの気持ちを考えて大切に、不愉快な気持ちをさせないように環境を改善する事はもちろんだが、それよりも大事なものは、まず一人ひとりの態度とマナーなのかもしれない。日本人はそれを気づき、人に良い環境を整える中で、人が良い気持ちを生むことが出来るよう、自らの態度を見直すという、とても大切な姿だと感じた。

その後、ホテルにたどり着けない二人は地図もネットワークもなく、手にあるのはホテルの住所が書いてある紙のみ。街中で迷子になってしまった時、とあるすれ違ったおじいさんにその場所を聞くと、自分もよく分からないと言った後、去っていくかと思いきや...

(つづく)

岩手大学3年 オンホーイン
 (メンバーリーダー)



感謝

(2018年度9月27日現在) 敬称略

●維持会員

熊谷大樹、工藤直子、今松桂子、熊谷太、吉崎陽、水田賢次、大関靖二、阿部深雪、光永尚生、濱塚秋二、濱塚れい子、増田隆、名古屋恒彦、名古屋理恵、植田一茂、戸貞文、高橋友恵、熊谷力實、尾形裕一郎、伊藤信彦、田村治之、川坂保宏、澤田優実、北田仁則、北田アユ子、古澤伸、武田理恵子、鶴丹谷三千代、高橋廉翔、人見見弘、菊地弘生、重石桂司、高瀬稔彦、千田汐里、工藤悦子、家村知佳、滝川佐波子、小笠原邦夫、遠藤昌樹、清水治彦、上中優奈、今野聖子、今野健男、林辰也、森山日菜乃、森山幹大、佐藤隼人、工藤あさひ、工藤誠太、佐藤洋一、中島敬泰、小野寺大介、魚住恵、神田橋慧一、山口貴伸、濱塚有史、濱塚真美、高橋奈菜、押切梓、齋藤之彦、南原良哉、小林茂元、伊藤眞一、伊藤みどり、小川嘉文、小川明佑、伊藤眞太郎、伊藤愛美、松尾聡子、中原眞澄、日語教会、島田茂、佐藤翔

●寄附金

今松桂子、熊谷大樹、光永尚生、濱塚秋二、濱塚れい子、増田隆、高橋友恵、熊谷力實、伊藤信彦、中原眞澄

表紙の写真から



「これで第2回盛岡YMCAチャリティーランの全てのプログラムを終了します。有難うございましたー!!」よく晴れた秋の空に二人の若者の声がこだました。ミンミンリーダー(岩手県立大学3年)とピリケンリーダー(岩手大学3年)だ。大会MCとして5時間を超える長丁場を見事に仕切った。

「違いを超えてつながる」。寄付された方々、協賛企業、ランナー、実行委員やワイズの皆さん、多くの裏方リーダーやスタッフの熱い思いを背負っての司会。慣れない役割に相当なプレッシャーと苦勞が人知れずあったと思います。お疲れさまでした!!